



聖家族



家庭の霊性

使徒パウロも全家族に向かつて声を高めて言っています。「キリストの御言葉があなたたちの中に豊かに住まうように！」

さらに、コロサイ人への手紙の中で、キリスト信者の家族生活の真の福音宣教像を描いてくれました。現実的で豊かな内容をもつこのすばらしい一節は、家庭生活で起り得る数々の困難を描いているため、家族の霊性の様々な要素を含んでいます。(コロサイ3・12〜21参照)

相互愛。「何よりもまず愛をまとうえ。愛は完徳のかなめである。」
従順と尊敬。「夫が妻に、妻が夫に、両親が子供たちに、子供たちが両親に対する態度。主にふさわしいように……そうすれば主に喜んでいただけるから。」

相互理解。「互いに忍び、他人に不平があってもゆるし合え。主がゆるされたように、あなたたちもそうせよ。」

教皇様の杖

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1989
発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

真の愛の心づかい。「深い慈悲、情け、謙遜、柔和、寛容をまとうえ。」
同時に、パウロは全てのものに先立って倫理的・宗教的教育のためにふさわしい環境としての家族、すなわち最初の教会と人間の共同体を描いています。「すべての知恵によって教え合い、戒め合い……あなたたちが言葉と行いをもってすることはすべて、主イエズスの御名によって行え。」

召命は家庭で生まれる
召命の最初の基礎となる環境は、家庭です。そこからキリスト信者の召し出しが生まれ、形成され、明らかにされるのです。イエズスの召し出しがナザレトの家庭の中で明らかになったのと同様に、今日のすべての召命も家庭において生まれ、明らかにされるのです。現代の家庭は神から受けているこの仕事を常に意識していなければなりません。すなわち、神が一人ひとりに割り当てられた役目に気づくように子供を育てることです。各自それぞれに成し遂げるべき使命があり、その役目は他の誰かが埋め合わせることはできません。一人ひとりが招かれています。

兄弟と共に社会を築く者として、平和の建設者として、人類への神の愛の証人として、そしてこの一般的な召命がやがて、聖職者として、修道者、宣教師として、また様々な信徒の奉仕として、「すべてを置いて」(ルカ5・11、マテオ4・20参照、マルコ1・18参照)従え、という特別な召し出しとして示される時、家庭は子供たちの心に根を下ろし成長する種が神の手で播かれる恵まれた場となります。こうして家庭は、両親がキリストの司祭職に参加するという事実を最高度に示す場となるのです。

ナザレトの隠れた生活

ルカによる福音書のナザレトの聖家族の生活は、家族社会の内に私たちを招き入れます。この家族のふところ、マリアとヨセフに親に従うように、マリアとヨセフに(従って)生活されたことにより、世の贖いが実現しました。イエズスの成長につれ、神と人の前にその知恵も背丈も寵愛もますます増し、御母マリアは「これらの記憶をみん心におさめておかれた」のでした。

星が先に立ち
子供のおいでになる所の上にとどまった。
(マテオ2・9)



絶えず祈る

希望を盗まれないように——

※ 本気でキリストについて行きたいなら、キリストへの愛が成長し、その愛が続いて欲しいと思ふなら、祈りに忠実でなければなりません。祈りはキリストに生きる人生の活力の源です。祈りがなければ信仰も愛も死んでしまいます。毎日の祈りと日曜日のミサ聖祭(聖体祭儀)に誠実であれば、皆さんのイエズスへの愛は増すことでしょう。そして、世間からは決して得られぬ深い喜びと平和を得るでしょう。しかし、祈り方がわからないとか、正しい方法で祈っているかどうかかわからない、と私に打ち明ける若者が大勢います。ここでもう一度、キリストという御手本を見なければなりません。イエズス御自身は、どのよ

うに祈られたのでしょうか？

まず第一に、イエズスの祈りは喜びと賛美を特徴としています。「イエズスは聖霊によって身をふるわせながらこう言われた、『天地の主なる父よ、あなたを賛美します。』(ルカ10・21) さらに、最後の晩餐の時に、聖体祭儀を教会にお委ねになりました。それは、御父に光栄と感謝と賛美を捧げる最も完全な方法として、いつまでも存続するものです。

しかし、苦しい時も何度となくありました。激しい苦痛と苦悩の中であって、イエズスは神に心の限りを述べ、御父の中に慰めと助けを見出そうと求められました。ゲッセマニの園で、内的な戦いはいよいよ激しくなり、イエズスはもたえていよいよ切に祈られたので、御汗は血のしずくのように地に落ちた(ルカ22・44)のでした。「イエズスはいよいよ切に祈られた。人生で困難を経験する時、苦しい決断に迫られる時、あるいは誘惑と戦う時の私たちにとって、何とよい手本でしょう。イエズスはこのような時にも切に祈られました。私たちも同じようにしなければなりません。

祈るのが難しい時に最も大事なことは、祈るのを止めないこと、祈る努力をあきらめないことです。そういう時には聖書や教会の典礼文に頼ってください。福音書に記されているイエズスの生涯と教えについて黙想してください。使徒たちの知恵と助言について、また預言者たちの挑戦的なメッセージについて深く考えましょう。詩篇の美しい祈りの数々を自分のものとするよう試みてくだ

さい。靈感を受けた神の御言葉の中に、皆さんが必要とする霊的な食物を見出すことでしょうか。何よりもまず、教会の最高の祈りである聖体祭儀に共同体と共に真心をこめて参加する時、皆さんの霊魂は再び生き生きとなることでしょうか。

カナの婚宴でのイエズスと御母マリアの物語を憶えていますか。宴の最中にぶどう酒がなくなった時、マリアは給仕人たちに「何でもあの人の言うとおりにしなさい」(ヨハネ2・5)と言います。給仕人たちがマリアの忠告に従うと、イエズスは彼らの信仰に報いて水をぶどう酒に、今まで供されていたぶどう酒を遙かに優る良いぶどう酒に変えられます。マリアの忠告は今日もあてはまります。それは、人生で真に成功するには、イエズスの意向を知り、それを行うこと、イエズスが私たちに言われることは何でもする必要があるのであります。正しい祈り方であるとはいえず、嘆願の祈りは神に何かを乞い求めるとか、特別の助けを得るだけのものではないことを、祈る時に承知していなければなりません。けれども祈りはまた、神への感謝と賛美、礼拝、さらによく気をつけて聴き入る、神の赦しを求めるといった特徴をもっています。イエズスの忠告に従い、絶え間なく神に祈っていれば、上手に祈るようになるでしょう。神御自ら祈り方を教えてください。神御自ら祈り方を教えてください。

祈りは確実に皆さんの人生を変えていくことができます。それというの、祈りは自分に向かって注意を向け直し、皆さんの理性

と心を神に向かわせるからです。自己の限界と数々の罪をもつ自分しか見ていないとすれば、たちまちに悲哀と失意に負けてしまします。けれども主に目を向ければ、心は希望に満ち、理性は真理の光に洗われて、福音書が約束と生命とにあふれていることを悟るようになります。祈りは聖霊——真理と愛の霊、この世でその使命を成し遂げられるようにと教会に与えられた聖霊——に向かつて心を開くためにも役立ちます。悪に抵抗して善を行う力、神の王国の建設に自らの役割を果たす力を私たちに与えるのは聖霊です。

ペンテコステの聖霊の象徴が火の舌であったことは意味深長です。実際、聖霊が私たちの人生における神の御働きについて語る時、象徴として火が度々使われています。聖霊は私たちの心に火をつけ、神の御業に対する熱意を起させるからです。そして祈れば、聖霊が私たちの内に神の愛と隣人愛をかきたてます。聖霊は私たちに喜びと平和をもたらし、現代の科学技術の世界は沢山の娯楽や数々の慰安を提供します。人生から一時的に逃避することさえできるというのです。けれども、この世が決して提供でき

ないもの、それは永遠の喜びと平和です。これは、聖霊だけが与えることのできる賜です。この賜を私は皆さんのために乞い求めます、皆さんが希望を強くもち、愛において忍耐強くなりますように。ところで、以上が可能になるためには条件を満たさなければなりません。すなわち祈り、つまりキリストとの接触、神との交わりなのです。愛する若人の皆さん、私のメッセージは新しいものではありません。以前にこのメッセージを送りましたが、神の恩寵と共に私は再び同じメッセージを送ります。(九・十二)

福音宣教の ありかた



師の声

1 (…福音宣教は、まず第一に司教の仕事です。これはまた、牧者に欠くことのできない協力者・司祭の仕事です。またこれは、皆さんが抱きしめておられるキリストのためです。修道士のものであります。信徒のものであります。信徒は、この世の真只中において神の王国の建設に招かれているからです。もし皆さんの教会がキリストのメッセージを受諾するならば、羊はそれについて行く、羊は彼の声『キリストの声』を知っているからである(ヨハネ10・4参照)と心から言うことができます。…)

2 師である善き牧者の声を知り、知らない人の声にはついて行かないという事は、今日の福音宣教の特色となる本質的な要素、すなわち唯一の師である主イエズス・キリストの教えに対する忠誠を意味します。

前任者パウロ六世教皇は、使徒勧告『福音宣教』の中で教えています。「福音宣教とはまず第一に、単純率直な方法で、イエズス・キリストによって聖霊のうちに啓示された神をあかしすることです。神はおん子のうちに世を愛され、受肉されたみ言葉のうちに、すべてのも

の存在を与え、人々を永遠の生命に招かれたことをあかしすることです。26番) こうして、福音を伝える者も、伝えられた者も、イエズスの教えに対しての厳しい、そして愛のこもった忠誠という避けられない義務を負います。福音を伝える者は神の御言葉の「主人」ではなく、むしろ代行者であり、下僕であるからです。他方、私の『要理教育に関する使徒勧告』の中で思い起したように、「キリストの弟子となるものは、その信仰の服従が完全であるためには、『信仰のこゝとば』を、そこなわれず、歪められず、弱められないで、本来の厳しさと力に満ちた完全なものとして受ける権利をもっている。』(30番) すなわち、その根源であるキリストに対する、その啓示された内容に対する、そしてその御言葉を受けとる人々に対する、完全な忠誠です。この人々は、私は門である。私を通して入る

説教・講話・書簡等の抄記

者は救われる。(ヨハネ10・9)と言われているその門を通じて入り、救われねばなりません。

けれども、福音が宣教される環境の具体的な状況を考慮することを忘れてはなりません。(…)現在の特徴をこの場で全て取り上げることはいきませんが、幾つかを手短かに強調したいと思います。

3

福音宣教とはキリストのメッセージを全ての人々にもたらし、それによって皆が活気づく、生き生きとなることを意味しています。その意味で、福音宣教は人間の尊厳を完全に尊重すべきことを力説し、人間の尊厳を犯す不正な状況や組織を変える助けとなるのです。

イエズスは公生活の間に、様々な肉体的・道徳的悪に悩まされている大勢の人々に会う機会がありました。神の王国の存在のしるしとしてイエズスは奇跡を行われ(マテオ12・45参照)、また出会った人々全てのために心を配られました。これらを見て人々は大いに感嘆し、あの方はすべてをよくされた。聞こえぬ耳を聞こえさせ、おしの口を開かれた」と言ったのです。(マルコ7・37)

そういうわけで、パウロ六世は思いつきました。「福音宣教と人間の進歩——開発と自由——の間には実際に深いつながりがあります。(…)福音宣教に際して今日さかんに論議されている問題、この世の正義、自由、開発、そして平和に関する諸問題の重要性を無視できればとか、無視したならばということを受け容れるのは不可能です。そういう事は苦しんでいる隣人、貧しい隣人を愛する

という福音書から来る教えを忘れることであるからです。(『福音宣教』31番)

愛する兄弟姉妹の皆さん、ここで私は最近この事に関して指摘したことを繰り返したいのです。「そうです、教会は自ら貧しい人々を優先的に選択します。優先的に選び出すのであることを十分心にとめてください。従ってこの選択は(排他的な、他を退けるようなもの)ではありません。(…)救いのメッセージは全ての人々に予定されているのですから。そ

福音宣教に必要なのは、神の御言葉とキリストに対する完全な忠実です。「信仰のことはば」を歪めず、そこなわず、本来の厳しさと力に満ちた完全なものとして、伝えることです。

の上、本質的に神の御言葉に基づいた選択です。科学や対立するイデオロギーの数々によって描かれた基準に合わせるのではないのです。そんな基準は往々にして貧しい人々を、観念的、政治経済的なカテゴリーにおとしめてしまいます。けれども「教会の選択は堅固な取り消すことのできない選択(ローマ司教区の枢機卿と高位聖職者へ)であります。キリストに、福音書に、教会の基準に一致している人々に、余すこ

ろなく忠実な福音宣教こそ、現在も未来に関しても、重要な点です。

教え全体への忠実を

4

最後に、現時点での福音宣教は、信仰を明らかにしなければなりませんし、信仰深い人々がさらされている多くの危険を避けねばなりません。

聖書朗読は「キリストを通して」群に入る人々のことを述べています。こうした人々もまた、群に属していませんし、その上彼らは宣教者、羊飼いと参加していません。司教、司祭、修道者、信徒がこの宣教に参加していません。この人々は福音の種をまく人です。「門から入らず」に「盗人や強盗のようにほかの所から乗り越えてくる」人々に対するイエズスの容赦ない排斥の言葉は、私たちの役割に対する重い責任感と配慮を要求しています。「門から入らない人」は、羊の群にとっては「見知らぬ人」なので、羊は「ほかの人にはついて行かず、そんな人からは逃げてしま

う。ほかの人の声を知らないからである。(ヨハネ10・1-5)「盗人は盗み、殺し、滅ぼすためにだけ来る」(ヨハネ10・10)のです。

5

福音書や真の福音宣教を歪めるもの全て、間違った教えや偽預言者たち、福音書を教会の認めない意味に解釈すること、現代の流行や政治的見地に立つて示唆する解説に順応した福音書の読み方、こういう態度全てを主は痛烈に排斥しておられます。たとえ嘘をつくのではないにせよ、こういう方法によって

真理への奉仕が混乱を助長させる結果となるからです。教会の中で常に起りうるこうした危険に対処し対抗するために必要なのは、主の牧者、聖職者、そして信徒が(キリストのメッセージ全てに)対して絶対に忠実を保つことであり、主の御声に耳を傾けることです。真理のため、そして羊のために愛の最高の証を与えられた主に、全員が

胎児は人間である

胎児の安楽死は道徳的に正当化できない

ならわなければならぬのです。「父が私を愛されるのは、私が自分の命を与えるからである……それは私が父から受けた命令である。(ヨハネ10・17、18)

このようにできるなら、宗教的内容をほとんど持たないグループの活動から生じる危険の数々に信徒をさらすことなく、実りある福音宣教が可能になるのです。(二一四)

誕生前の子供の非常に微妙な存在の段階で障害をもつ恐れがあるとき、あるいは、筋の通らぬ、また決して正当化できぬ理由をふりかざして、罪のない子供の生命を断とうとする誘惑が猛威をふるっていることは周知の事実です。

それゆえ、教理省の指針「ドヌム・デイ」(生命の賜)において繰り返し確認された事柄はまことに時宜にかなうと言えます。「人間はその存在の最初の瞬間から人(ペルソナ)として尊敬されなければならぬ」(「バティカン公会議の教えもこう述べています。「生命は受胎の時から最大の注意を払って守られるべきである。中絶や胎児殺しは憎むべき罪である」。(『現代世界憲章』P.51)これが教会の不変の教えであり実践なのです。

先に引用した指針は、胎内診断や胎児に対する介入が正当と考えられ

母親の子宮内でのあらゆる段階における生命の尊重は、新生児、特にきわめて発育が遅れたり生まれつき障害をもった胎児の尊重の前提となります。このような生命を軽視する殺しの論理に至ります。事実、今日あちらこちらで新生児の安楽死の合法化を求め、障害をもった胎児や早産のために生育が困難で危険と思われる新生児の安楽死の実践を望む声が増えています。

「健康な子供に対する権利」なるものを主張し、いわゆる「生命の質」を生命の受容に対する横暴な基準の適用とみなしている人々がいるのです。(八八・四・一四)

不変の教え

信仰の客観的内容に 対する忠実



公会議の教えを伝えるのに最も効果のある方法は、司牧者が証人となることです。つまり、司牧者自身の生活が典礼に対する愛と敬いの念、聖なる教義、特に聖体への深い理解に基いた愛と敬いの念に輝いていることです。また、健全な要理教育も秘跡にふさわしく与るために大変重要です。日曜日の礼拝の意味するところとその必要性に関する要理教育は、(家庭と学校)の両方で与えられなければなりません。学校を卒業した人々、特に社会に出た若者たちには秘跡に与るよう絶えず励ますことが必要で、共同生活はいつでも彼らを歓迎しなければなりません。「秘跡の生活は、秘跡の意味の真の理解にもとづかないときは、貧困になり、早晩むなしい形式主義に陥り、また要理教育自体も、秘跡を實踐によって養われたいとき主知的な形になる。』(要理教育に関する使徒的勧告) (23)

本であり、その内容を守り新しい世代へと伝えることは司教の教導職と司牧職に属する重大な責任です。この点を皆さんの聖職の主要面にしよう勧めたいと思います。

聖体について話したことはすべて、赦しの秘跡にもあてはまりません。他の機会に私はこの二つの秘跡の間の緊密な繋がりに注意を促しました。『人類の贖い主』20【里脳枢機卿訳】と『ドミニチエ・チエネ』7【デル・コル訳参照】新しい赦しの秘跡の儀式書序文も番は次のように述べています。「ゆるしの秘跡を通して御父は、ご自分のもとに帰って来る子どもを受け入れ、キリストは失われた羊を肩にのせて囲いに連れもどし、聖霊はその神殿を再び聖化し、より豊かにそこに住まわれる。こうして神の教会の会食は、遠くから帰ってきた子のために大きな喜びで満たされる。』

聖体を取り上げる時と同じく、赦しの秘跡も深い要理教育を要します。司祭自身がこの秘跡の大切さを理解すれば、信徒が個別の告白と赦しは聖性を育てるために必要であり価値があること、また、自分に大罪ありと気づいた人が神と教会とに和解するための通常の方法であることを認めるでしょう。(教会法 90 条参照) (六・十三)

1 キリストの弟子になるとは、知的な話に没頭することでも、ある種のイデオロギーに身を投じることでもありません。キリストの弟子になるとは、私たちを御自身の肢体としてくださる主なる神との出会いのことなのです。教会の交わりにおいて様々な変化を経験する私たちは、人間の改心と現世の生活の肯定的な進展の可能性を認めることができます。

カトリック知識人は、世を変えるため努力を重ねるにあたり、人間中心主義の進歩礼賛や現世的救済論を本当の希望であるかのよう考える間違いを避けねばなりません。キリストを着る、すなわち新しい民であればあるほど、(キリストの)復活が有する現実の力を証することができるようになります。そして、これこそ人間の歴史を決定する原動力なのです。神の似姿として創られ、愛の交わりにおいて「顔と顔」を合わせて見てもつるようになされている、一人ひとりの真理を渴望する心は、キリストとのこの出会いによってのみ満たされます。

真理であるキリストは、私たちを真理へと導いてくださいます。この真理への道を歩むとき、教会の教導職に忠実を保つならキリストの真理に喜びと信頼の心で与ることが出来ます。この忠実、皆さんの自由を妨げるところか、自由を確立し、研究の基礎を堅固に築き、人間の善を具体的な行いにあらわすための力となり光となります。私は再び勧めます。神がキ

リストにおいて啓示され、聖霊の助けを受ける教会に委ねられ、ペトロの座と一致を保つ使徒の後継者(司教)が教える真理を心静かに証し、またその全てに忠実を保ってください。

2 カトリック知識人は、二つの誘惑に絶えず抵抗しなければ

文化の操作

知的禁欲



3 反対に、皆さんは、人間の経験の全て、人々の生活における善と美と真理に対して情熱的な関心をおもちです。連帯の心で人々の、特に貧しい人たちの具体的な必要や、希望に応じたいと望んでおられます。全ての人々に役立つために知的・専門的手段を投入せんとする皆さんが、人々のために働くに当たり導き手となる識別の鍵をお持ちです。キリストは、神の慈しみ深い愛を私たちに示されたとき、同時に人間の本来の姿、その召し出しと目的、人間の尊厳全体をなす特徴をも明らかにしてくださいました。キリスト教の間観が与えられているからといって、研究や調査、対話の必要はないということではありません。キリスト教の間観は、人間の善特に教会の社会教説に役立つ基礎なのです。

文化的操作

知的禁欲

なりません。一つは、信仰の真理を自らの知的な枠に組み込ませ、現代の文化を操作する強力な手段に変えてしまう誘惑です。こういう状態のとき必要なのは、知的な禁欲です。すなわち、真理に服従し、教会の交わりの秘義に深く根を下ろすことにより生かされ、そして強められる必要があります。もう一つの誘惑は不可知論です。真理追求を止めさせようとする誘惑

これらのことを十全に宣言すればそれでよいというわけではありません。分析計画、社会改革等を示すために、右に述べたような原理(原則)を現代の文化と科学のデータに突き合わせ、実を上げなければならぬのです。教理聖省の指針 *Libertatis Nuntius* と *Libertatis Conscientia* (解放の神学について) は、この点について貴重な指針を与えてくれます。(八七・九・二五)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 ■毎月 十日発行 ■定価 一部七十四送料四十円 ■一年予約八〇〇円送料五〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要 郵便振替 神戸 3-72393